
KAMEN RIDER GANBARIDE-CLIMAX HEROES-

ログ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KAMEN RIDER GANBARIDE -CLIMAX
HEROES -

【Zコード】

N 8 5 4 4 X

【作者名】

ログ

【あらすじ】

謎のガンバライドカードを手にした少年、門司仁。そのカードに描かれているのは、知らないライダーだった。カードに導かれるかのように、ガンバライドに吸い込まれ、目にしたものは壮絶なライダーバトルだった・・・。

ベルトキタ - - - - - (前書き)

これは新たなる仮面ライダーの戦いである。

♪ 137319 — 4660 ♪

ベルトキタ - - - !

俺は、ゲームセンターをぶらついていく。
目の前にはガンバラайдがある。

前から、興味あつたんだ。

でも恥ずかしくてできなかつたんだ。

一回ぐらいなら、恥ずかしくもないよね。

チャリン。

百円玉を入れる。

すると、カードが出てきた。

これが、ガンバラайдカードか。

ピンク色の淵のディケイドが使用するものに少し似ているカード。
そこに描かれているのは、知らないライダーだった。

「仮面ライダー ガンバラайд」??

そんなライダー知らないなあ・・・。

俺は、そのカードしか持つていなかったため、それをスキャンした。
すると・・・。

俺の体がガンバラайдの筐体に吸い込まれていった。
嘘だろおおおおおおお?

あれ・・・ここは・・・?

俺は、夜の廃墟に倒れていた。

すると、誰かがやつてきた。

？？？？？？？「お前、ただの人間だなあああ？」

目の前には、地獄兄弟と、紫目のオーズがいた。

ギッケホッパー（以下ギッケ）一ふた倒されてもいいのかあ・・・

1

ハンチホッパー（以下ハンチ）・透じでせる！！

卷之三

馬ぐた

お前みたいなたかの人間に
ここでは生きていけない

あー、大体分かつた。

老女の世界みたいな感じなんだね

キックH「お前に地獄を見せてやる。」

卷之三

ああ・・・、俺もうダメだ。

れどなら
え？

俺の目の前に、一人のライダーが立ちはだかる。

？？？？？ 「大丈夫か？」

？？？？一とにかく、出会ったからには、お前もタチだ！地獄兄弟先な！」

そこには、ディケイドとフォーゼがいた。

フォーゼ「俺は、仮面ライダーフォーゼ！！ガンバライド、キタ！」

！」

なんだ？ここは？

ライダーが目の前にいる？

夢のようだ！

フォーゼ「おい、アンタ。名前は？」

俺
？俺は、門司仁かどつかじん。

フォーゼ「仁か！気に入った！これやるぜ！」

フォーゼは、俺にフォーゼドライバーのような、アクセルドライバー

ーのようなものを渡した。

赤い起動用のスイッチがない。

その代わり、ベルトの真ん中に、メモリスロットがある。

俺は、さつき手に入れたカードを相手に見せた。

仁「見る！俺も仮面ライダーだ！」

ベルトを腰に巻きつけた。

すると、カードはガイアメモリへと変わった。

「G」と書かれたガイアメモリだ。

仁「変身！」

「ガンバライド」

俺は、メモリを鳴らし、スロットに差し込む。

「3 . . 2 . . 1！」

そして、グリップを前に動かす。

「ガンバライド！！ ガ・ン・バ！ガンバ！！」

再び、メモリ名を挙げ、いつかのガンバライドのCMの音声が流れ
る。

俺は、仮面ライダーガンバライドになった。

ガンバライド「俺は、ガンバライドとして戦う！！終わりがくるま

で！！

「ディケイド」「俺は通りすがりの仮面ライダーだ！覚えとけー！」

「フォーゼ」「宇宙キタ
！」

「ガンバラайд」「勝負だ！」

「オーズ」「ウガアアアアアアアア！」

「オーズは俺に襲い掛かってきた。」

「ガンバラайд」「はあつ！！」

パンチH「そらあ！」

「フォーゼ」「これならどうだ！」

「ロケット・オン」

「フォーゼ」「ロケットパンチ！！！」

パンチH「ぐわああああああああ！」

パンチHは一発でノックアウトされた。

キックH「ライダー···キック！！！」

「ファイナルアタックライド」「ティデイティティティケイド」

「ディケイド」「はあ——————！」

キックH「があああああああ！」

「ガンバラайд」「どうすりやいいんだあ···？」

「オーズ」「ぐわあああああ！」

「オーズはトランクロード、攻撃してくる。」

「ガンバラайд」「そりやあ！」

「そうだ···。スイッチがある！」

「俺は、一番右のスイッチを押してみた。」

「マシンガン・オン」

「俺の手に、マシンガンが取り付いた。」

ズバババババババババババババツ！

オーズ「ガアアアアツ！！！」

ガンバラيد「今回はこれで負けてしまいな！」

「マシンガン・ゲキレツアタック」

グリップを再び前に動かしてみた。

ガンバラيد「必殺技だああああああああああ！」

マシンガンから、無数のビーム弾がオーズを襲つた。

オーズ「ぐわああああああああああ！」

オーズと地獄兄弟は、カードになつてひらひらと中を舞つていた。

ガンバラيد「俺達は、何をすればいいんだ？」

「ディケイド」「」の世界は、ガントライドの世界だ。

「ガンバライド」「ガンバライドの世界?」

「そう、これはガンバラайдの世界だ。平行世界論は知つてゐるか？それぞれ独立して世界があるつていう。その世界の中の一つ、それがガンバラайдの世界だ。お前の世界にあるようなガンバラайдの筐体につながつてゐるんだ。」

ガンバライド「で、この世界では何をするんだ?」
フォニゼ「この世界のワイヤーダー金員と、ダチになる!」

デイケイドーちがう！俺達は、ここでバ-

ガシバフイド「くえ」、なるほど。。。

不意に爆発が起きた。

そこには書か主体のエイタリが一人いた。

「ディケイド」「ディエンド」とか云ふ言葉は、

卷之三

ガンバラideon「ティエンドかーお前にやる!!」

「マシンガン・オン」

俺は、マシンガンを乱射し

「デイエンド」「なかなかやるねーでもこれには勝てないだらうー。」

NEW電王「テデイ、カウントダウンだ。6秒でいい。」
テデイ「OK。・・・6。」

まずNEW魔王が切りかかってきた。

俺はそれを避ける。

5。

その隙を突いて、俺を突く。

4。

「ディエンドはジャンプした。」

「アタックライド ブラスト」

そして、弾を乱射する。

そして俺達に当たる。

3。

「フルチャージ」

NEW魔王「行くぞおおー！」

NEW魔王は走ってきた。

2。

「ファイナルアタックライド ティティティティティエンド」

ディエンドは俺達にターゲットを向けてきた。

1。

NEW魔王は俺を斬った後、「ティメンショントリニティ」と
まれ、俺達はその攻撃を受ける。

0。

「ディエンド」「タイムアップ！」

「ガンバライド」「ぐ・・・ぐはあああ・・・。」

「まだ実体を持つてるなんて、しぶといね。まさか、特殊な存在かもね。でも、このカードのライダー達はもうつよ。」
ティエンドは、カードを五枚、広げて見せる。

そこには、このようにカードが並んでいた。

仮面ライダー ノンチホッパー

仮面ライダー オーズ

仮面ライダー元ケイ

ティケイドとフオーゼがカード化してしまっていたのだ。

「テイヒンデ」「じゅあ、また会おう。」

卷之三

俺は仲間がいなくたゞかことで悲しみはあふれていだ

すると、の前に世界の端かなかつて、いた

そこなら、強くなれるかもしない。

俺は、そこに向かって飛び込んだ。

無のエリア／ディケイドのガセ

そこは、真っ暗な闇だった。

仁「で・・・ディケイドの話だと、ここはバトルロワイヤルで、一人になるまで戦い続け・・・・・つて俺はなんて世界に来てしまったんだよおおおおおおお！」

一人、嘆く俺。

？？「少年よ、慌てるな。」

仁「？？？誰？？」

そこには、桜井侑斗のような服装をした、一人の男性が立っていた。あれは、鳴滝さん？

鳴滝「よく分かつたな。君の仮面ライダー好きは良く知ってるよ。自称・預言者の鳴滝さんがなぜここに？」

鳴滝「自称ではないが・・・、バトルロワイヤルなんてディケイドの嘘だ。」

仁「なんでわかるんですか？」

鳴滝「この世界は、無数のエリアに分かれている……」

仁「エリア？」

鳴滝「君の知っているライダーの世界を再現したようなエリアもあれば、古き伝統を受け継いで暮らす民族が持つエリアもある。また、恐竜が未だにいるエリアがあれば、一日中戦争しているエリアもある。そう、ここは無数のエリアで成り立っているのだよ。」

仁「で、ここはどんなエリア？」

鳴滝「無のエリアさ。」

無のエリア・・・？」

一瞬、鳴滝の言葉に、耳を疑つた。

仁「無・・・ですか？何もなつて事ですか？」

鳴滝「そうさ、他のエリアは、「ズミックエナジーがあるが、ここにはない。それだけのことだ。」

仁「なるべくでも、何でこいつやって俺達は存在しているのだろうか……。」

鳴滝「言いたいことは分かつてる。でも、話がそれてしまつたね。じゃ、この世界について、話してやる。」

この世界は、ガンバラайдの世界だ。

2008年末に、ディケイドが本格的に活動する少し前に誕生した。そして、ディケイドは世界を巡るたびに出ていたが、なぜかもう一人ディケイドが存在した。

それが、この世界でさつき君が出会つたディケイドだよ。

君の知つてゐる、テレビで見るディケイドとは全く違うディケイドだ。そのディケイドは、あるときは廃墟でディエンドと戦い、風都でWたちと戦い、そして平地でたくさんのライダー達と共に闘っていた。そのディケイドは、多彩な技を習得していった。

10数もの過激な技を繰り出して、ライダーたちと戦つていた。

そのディケイドが倒したライダーは、死ぬことがなかつた。

ディケイドは手加減していたようだ。

そして、他のライダーに影響がなく、ある意味平和だつた。

しかし、元々はビル街しかないエリアが廃墟に風都に地下用水路に山寺など、いろいろなエリアが増えていった。

それが最近、急速に増え、100以上のエリアが誕生したんだ。

鳴滝「それが……このガンバラайдの世界だ。君は、この世界から出られなくなつてしまつた。」

仁「そんな勝手な！出る方法はないのかよ！？」

鳴滝「それが……ないことはない……ただ……入手が困難なゾーンメモリを伝説の祭壇に差し込めば、脱出できるそつだがな・

・。
「

仁「じゃあ、そのゾーンメモリを取つて来るぜー待つていろよー鳴滝
！」

鳴滝「ちょっと・・・。」

俺は、再び現れた壁に向かつて歩き出した。

仁「変身！』

「ガンバライド』

俺は、メモリを鳴らし、スロットに差し込む。

「3 . . . 2 . . 1 !」

そして、グリップを前に動かす。

「ガンバライド！』 ガ・ン・バ！』 ガンバ！』

再び、メモリ名を挙げ、いつかのガンバライドのCMの音声が流れ
る。

俺は、仮面ライダーガンバライドになった。

ガンバライド「行くぜ、行くぜ、行くぜええええええええええ！」

「ニンジャエリア／シノビ・超変身！」

ガンバライド「ここは、なにかな？」
俺は、まるで太秦映画村に来たような気分だった。
だって、ここは江戸時代のような町に立っているんだから……
ガンバライド「なんだ？」
京都か？それともサムライワールドか？」

？？？「惜しいな！」
ニンジャエリア「……って事は、忍者がいっぱいいるのか、忍者が支配しているのか、どっちかだな！」
ガンバライド「お前は誰だ？」
？？？「俺は、仮面ライダー・シノビだ！」
ガンバライド「よお！シノビ！」
シノビ「よりしく！」

シノビは、この世界を、悪の忍者軍団「くノ一」から世界を守つて
いるそうだ。

くノ一は女性だけで組織されてるそうだ。
ガンバライド「女性相手になぜ負ける？」
シノビ「バカか？そういうのは差別だぞ？でもか、強いぜ？トリッキーにさ。」
ガンバライド「そつか……じゃ、差別はやめとく……あれの事か？くノ一って。」
シノビ「そうだ！」
くノ一の戦闘員達20人が、俺達を襲ってきた。
戦闘員「アアアアアア！」
「マシンガン・オン！」
俺は、マシンガンスイッチを起動させた。

すると、弾が連射される。

戦闘員「グワアアアア！」

そして、マシンガンスイッチをオフにした後、それを抜き、サーベルスイッチを入れ、起動させた。

サーベルスイッチはマシンガンと同じ 部分に差し込むスイッチなのだ。

「サーベル・オン」

ズバッ！

シユパツ！

戦闘員「アアアアン！」

戦闘員「キヤアアアアアアア！」

「サーベル・ゲキレツアタック」

ガンバラيد「ツルギ・ゲキレツスラッシュユーーー！」

俺は、必殺技を繰り出す。

ズヴァアアアアアアアアツ！

戦闘員「アアアアアアアアツア！」

今回のくノ一、ある意味危険だ。

年齢制限の危険がある。

早いうちに倒してしまおつ。

シノビ「早いうちに倒すか・・・、さつきの戦い・・・なかなか良かつたよ！お前どなら、やれる！行こうぜー！」

俺達は9 - 1 CASTLEに来ていた。

このネーミングは間違つてないよな。

そして、その前にある池に俺達はもぐつている。

シノビ「静かに行くぞ・・・。

ガンバラيد「ああ・・・。」

「

俺達は、この池のそこにある、排水溝口に入り、そのまま進入。そして、隙を突いてボスを旬殺。

あまりにもシンプルで、不安なサクセンもある。

頑張らなきゃ。

俺達は排水溝口にもぐりこんで、何とか中に潜入した。

シノビと俺は、シノビの力で姿を消し、そろそろと歩いていた。

そして、1分、2分、3分と、時が流れていった・・・。

シノビ「あれ・・・さっき、この道通ったよな?」

ガンバライド「あ・・・そういえば・・・。」

シノビ「もしや・・・。」

ガンバライド「・・・?」

シノビ「ちょっと待つてろ。」

ガンバライド「お・・・おい!」

なにやら、シノビは奇妙な術を唱えた。

シノビ「はああああああっ! シノビ流忍法”壁破り”!!

忍法”壁破り”の力で、何とか、エンドレスからは逃れられた。
しかし・・・・くノ一はどうへ・・・・?

シノビ「こいだよ。」

ガンバライド「そうか・・・。」

シノビ「行くぞ!」

俺達は、ふすまを開けた。

すると、そこにくノ一がいた。

シノビ「成敗!」

くノ一「ぎやああああああああああああああああああああ!」

くノ一は、一撃で殺された・・・・。

しかし

ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ！

すると城の前に、大きな国人が現れた。

シノビ一 僕の役目はもう終わつた。

「お詫びください。お手数をおかけして、ごめんなさい。」

シノビ「俺の力をお前に託す。それが俺が鳴滝に言われた最後の使

命だ。

カシナライト　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・

今、信田できむらは鳴龍さんと、それ

51

シノヒ - 最終忍法” 忍押箱” >> シノヒスイツチ <<

銀河軍団の軍事力は、この戦いを機に飛躍的に強化された。

「シノビ・オン」

すると和風の音楽が流れ、俺の体を銀の光が包んだ

氣がつけて論が、既に黒が其の筋に形

ガンバライド！これが、お前の初強化だな！

ふに、シノヒの声が聞えた。

ガンバラライド「ありがとう！」

この装備は、腕にブレスがしてあるぐらいだ。

まずは・・・「壱」のスイッチを押そう。

「イリュージョン・オン」

俺は、3つに分身した。

ガンバラード「すぐに終わらせてやる！」

俺は、城をぬけ、巨人に向かつてとび蹴りを放つた。
巨人はよろめく。

次は、「弐」のスイッチだ。

「インビジブル・オン」

俺の分身能力がなくなり、そのかわり自分の姿を消した。
後ろに回り込み、連續蹴りを放つ。

巨人はそのままじい蹴りで唸る。

さらに、「参」のスイッチを押す。

すると、今までの効果が消え、手には手裏剣がある状態になった。

俺は、それを投げる。

巨人はまた激しく唸る。

ガンバラード「よしーとどめだ！」

「シノビ・ゲキレツアタック」

俺の後ろから、無数の手裏剣が飛び出し、巨人を貫く。

そして、俺は分身し、さらに姿を消し、飛んで連續蹴りを放つた。

巨人は、跡形もなく消えた。

仁「ふう・・・・さつぱりしたあ・・・・」

そう思つてるとまた、目の前に灰色の壁が現れた。

仁「次は、どんな世界かなあー??」

俺は、ワクワクしながら飛び込んだ。

すると、俺はなぜか、どこかの学校について、さりげなく学生服を着ていた。

仁「なんで、学生服？」

俺は、訳がわからなくなっていた。

周りを見渡すと、空を見上げている一人の青年がいた。
気を落ち着かせるため、俺も空を見ることにした。
その空は、とても青くきれいな、青空だった。

「ンジャニア・シノビ・超変身」（後書き）

シノビ「これで良かつたんだよな。あいつなら救えるはずだよな・・・。
」

シノビは「のポケットでつぶやいた。
誰にも聞こえないよ！」、そつと。

空我の世界／俺、転校！（前書き）

今回から、千藤光さんの小説「仮面ライダー空我～青空の勇者・
青空の伝説～」とのコラボ回です。
では、始まります！

空我の世界／俺、転校！

？「青空が、笑ってる気がするよ・・・。やっぱり空ヶ丘は最高だ！」

空ヶ丘・・・？」だ、それは。

仁「ねえ・・・君、名前何ていつの？あと、こじらせビー？」

？「僕は空野輝！あと、こじは空ヶ丘にある都立空ヶ丘第一高校だよー！」

鳴滝「ガンバラيدがレーダーから消えてしまった・・・。ベルトが破壊されてしまったのか？それとも、まさか・・・。」

鳴滝は、だんだん不安になってきた。

白色のアストロスイッチカバンを持つて。

輝「その制服・・・まさか転校生？」

仁「そり・・・みたいだな！俺は、門司仁！よろしく！」

俺は、別のHリアに来たときに何か起きたのだと思うと、このHリアに流されることにした。

輝「でさ、その名前なら、僕と同じ一年だね！」

仁「くえ・・・。」

キーンゴーンカーンゴーン

俺は、先生の指示で所属先のクラスの前まできた。
ここがあ・・・。

先生「門司君へ、入ってきてください〜！」

仁「あ、は〜い！」

俺は、教室に入った。

すると、拍手喝采で迎えられた。

なんか嬉しかった。

そのクラスメート達の中にひとり、輝がいた。
とても嬉しそうだった。

仁「はじめまして、門司仁といいます。特技は短距離走です、この学校のことは、まだまだ良く分からないです、頑張って慣れていきたいと思います。以後、よろしくお願ひします。」
俺は、適当に挨拶しておいた。

先生「じゃあ、門司君は、さんの茜さんのとなりね。」

俺の隣の席の子は茜ソラといつらしい。

ソラ「門司君、よろしく。」

なんか可愛い子だな。

そして、4時間ほど時間は過ぎた。

弁当の時間が過ぎ、5時間目に入ろうとしたその時、先生の代わりにはいつてきたのは・・・。

ライオンの姿をした怪人だった。

みんなは、思いつきり笑い出しだが、俺にはわかる。

仁「よお！怪人野郎！早速倒させてもらひぜー！」

俺は、椅子から立ち上がった。

そのときには、怪人はもう、一番前の席の人の首を絞めていた。

「ガンバラайд」

俺は、メモリを鳴らし、スロットに差し込む。

「3 . . . 2 . . . 1 !」

仁「変身！」

そして、グリップを前に動かす。

「ガンバラيد！！ ガ・ン・バ！ ガンバ！！」

再び、メモリ名を挙げ、いつかのガンバラードのCMの音声が流れる。

俺は、仮面ライダー ガンバラードになった。

ガンバラード「お前さんよお！ 怪人退治なら俺にまかせな！」

「テープ・オン」

俺は、部分のスイッチを押した。

すると、大きなテープカッターのようなものが足に取り付いた。

ガンバラード「行くぜっ！」

すると、黄色いテープが怪人のほうへと向かっていく、

そのテープはモジュールから出ているのだ。

そして、怪人に巻きつくと、自然にテープは切れ、モジュールの中に収納された。

俺は、そのスイッチの電源を切り、怪人のほうへ走つていった。そして、その怪人を持ち上げ、窓から外に投げた。

俺は、急いでグリップを動かした。

「ガンバラード・ゲキレツアタック」

俺は、窓からジャンプした。

すると、ガンバラードのスロットのようなものが、いくつも現れ、それを突き抜けていく。

そして、気づいた頃には相手にとてもなく強いキックが決まった。

怪人は大爆発を起こした。

輝「君も仮面ライダーだつたんだね！！」

宏「すごいなああああああ！」

みんなから拍手の嵐が巻き起こる。

それもつかの間、学校中に悲鳴が響き渡った。

それは、外で体育をしている生徒たちも同じだった。

ガンバライド「今行くぜ！」

俺は×部分のスイッチを押す。

「スケボー・オン」

さらに、部分のスイッチを押す。

「バスター・オン」

俺は、スケボーに乗り、大きなバズーカーのようなバスターで攻撃する。

生徒を襲っている怪人たちの一撃で爆発する。

ガンバライド「大丈夫か？」

生徒「は・はい・・・・・。」

俺は、二つのスイッチを切り、部分のスイッチを押す。

「シノビ・オン」

俺は、シノビステイツになつた。

「イリュージョン・オン」

俺は、壱のボタンを押してモジュールを起動させる。

3人に分身した俺は、それぞれの場所で戦うように動いた。

その頃、教室では。

ソラ「きやああああああああああああ！」

輝「変身！」

輝は空我に変身する。

そつ、空我こそがこの世界の一人目のライダーなのだ。

宏「ちっくしょおおおお・・・。」

そして、樹木に変身できるはずの宏はベルトの役割をする//オガい
ないため、変身が不可能なのだ。

？？「待たせたな！宏！」

宏「ミオオオオ！」

ミオ「行くぞ！」

ミオはジユモクギアになり宏の腰に巻きついた。

そして左手を上に上げ、右手でバックルのレバーをつかむ。

宏「変身！」

そう叫び、レバーを右から左に動かす。

すると、宏は仮面ライダー樹木へと変身した。

空我「はあ！そりやあ！てやあ！」

樹木「そりやあ！はいいい！せいやああああああ！」

空我や樹木は怪人と戦っていた。

すると・・・・・。

どこからか、一人とも、銃で狙撃された。

ディエンド「さてと、お宝はどーかな・・？」

悪魔のスイッチ／返せ！そのカード！

「ディエンド」「空我に樹木……。そしてこの学校にはガンバラيدもいる……。僕のカードを探してますよ。」

「カメンライド バース」「カメンライド サイガ」「カメンライド ライオトルーパーズ」「ディエンド」「さてと、お宝はどこかな？」

クウガ「あれは……ディエンド？」
樹木「でも、あのライダー達、こっちに向かつて攻撃してくれる。」

僕達はその攻撃に見事ぶち当たった。

バース「さあて……お仕事開始！」

「サーチャー・オン」
ガンバラيد「これで、ライダーをサーチするぜえっ！」
俺は、レーダーのようなアイテムを、部分に取り付けて、ライダーと怪人を探していた。
すると、ピンポイントで、体育館に当たった。
ガンバラيد「さてと、行かなくちゃな。」

クウガ「どうしようか……ん？」

さつき、体育の授業で走り高跳びをやつたみたいだ。
その棒を僕は、手にとり、力をこめて。

クウガ「ドラゴンフォオオオム！」

僕はドラゴンフォームになつた！

ドラゴンロッドの一撃が、ライオトルーパーを弾き飛ばしていく。
樹木は”雨”と書かれたゼンマイをバックルに差し込む。

「レイニアーフォーム！」

樹木は緑色から水色のボディへと変化を遂げる。

これがレイ＝「フォーム」なのだ！

そして、レインジャーは、ガンドサイカを空中から地面に打ち落とす

「ウイップ・オン」

俺は、部分にはじめて使うスイッチを入れ、起動させた。すると、ムチのようなものが現れた。

カンバライトー 体育館、キタあああああ !! !!

僕は近づいて彼の手を握り、彼の顔を覗き込む。彼の瞳には、僕の想いが映っている。

イニシギ「ジノバラニ」

!

「ディエンド、ま、追われるのも嫌だし、これだけ渡すよ。」

ヒンエキモミジの一枚のかードを渡した。

ガンハ『ライド・気か和くや』じゃねえか……ありかどゆ……三で

「アーネスト・ヘミングウェイ」

突然、二枚の手が光出し、世界の壁が現れた。

もひのと、俺の意識ではなー。

「イヤホン」「ん~じゃ、楽しんでくれ

「アタッククライド インビジブル」

そして、ディエンドは消えた。

ケテガ・エリカヲコソン! ブレヒハヒヒヒイケ!

タガは龍を描くよ、ほんまに、口、口を振り回して、イノトハ

ハを一括りに
ノミニパワ

「レイニア・ハワー・チャージ！」

樹木「スプラッシュユストラアアアアイク！」

樹木はパワーを銃にこめ、巨大なエネルギー砲を発射した。

サイガは、跡形もなく消え去った。

ガンバラайд「一気に決める！」

「バスター・ゲキレツアタック」

ガンバラайд「ライドチャアアアアジ！」

俺は、部分のバスターを使い、パワーチャージをはじめた。

「ブレストキヤノン セルバースト」

バース「派手に行くか！」

バースも準備をはじめた。

ガンバラайд「ラアアアアアアイジング！ストラアアアイク！」

そして、どこかで聞き覚えのあるようなセリフを発した。

バース「ファアアアアアイナル！ウエエエエエブ！」

バースもどこかで聞き覚えのあるようなセリフを発する。

二つの光弾がぶつかり合い、爆発を起こす。

最後に勝つたのは・・・ガンバラайдだった。

ガンバラайд「調子乗るからだ・・・。」「

ガンバラайд「それで、水色のは、宏君とミオさんで樹木・・角が折れてるクウガは・・輝君だつたんだ。」「

輝「そうだよ！」

宏「よろしく！」

ミオ「俺は、ベルトになるんだ！」

ガンバラайд「よろしく！」「

その後、いろいろあつて一日は終わった。

仁「輝君・・・。」「

輝「どうしたの？」

仁「実は俺・・・この世界の人間じゃないんだ。」「

輝「ええええええええええええ！」

仁「だからさ、あの時変な質問をしたんだ。」「

（回想）

仁「ねえ・・・君、名前何でいいの？あと、ここはどこ？」

輝「僕は空野輝！あと、ここは空ヶ丘にある都立空ヶ丘第一高校だよ。」

輝「それで・・・」

仁「だから、俺を泊めてくれる宿とかないかな？」

輝「だったら家にくればいいよー」

僕は別にいいと思う。

マイペンライは宿としても利用されているんだし。
あ、マイペンライって僕の家のことだよ！
僕の家、喫茶店やってるんだ。

そして、マイペンライ。

輝「おやつさん！今日の夕飯は？」

おやつさん「納豆カレーだよ！」

おやつさんはこの店長である。

そして、僕達は納豆カレーができるまで待っている間、クラヒフォーゼ（Wi-Fi版）で遊ぶことにした。

仁「ディケイド・ノーマル&フォーゼ・ベースステイツ」VS輝「クウガ・マイティ&オーズ・タジヤドル

結果・輝の勝ち！

仁「オーズ・紫田」VS輝「クウガ・アルティメット&ディケイド・ノーマル」

結果・輝の勝ち！

結果・輝の勝ち！

仁「オーズ・タジャドル&オーデイン」VS輝「クウガ・マイティ

"ゴウラム"

結果・仁の勝ち!

そして、納豆カレーができた。

納豆カレーを食べながら、僕と仁君は話をしていた。

今日は、僕と仁君、そしておやつさんしかここにはいない。みんな用事で別の場所にいるんだ。

輝「それで、仁君の世界っていうのは・・・？」

仁「俺は、元々こんな感じの世界に俺は住んでいた。怪人もライダーも実物はいなかつたが、ライダーはテレビの中で怪人を倒していたよ・・・」

輝「そうなんだ・・僕の世界も同じように仮面ライダーはテレビの中だけの存在だつたんだけど、急に怪人が現れて、僕はクウガになつたんだ。

仁「俺は、ガンバラードをしようとしたら、仮面ライダー・ガンバラードってカードが出てきたんだよ。そしたら、俺は筐体に引きずり込まれて、気づいたら地獄兄弟とオーズに睨まれてて、ピンチになつた際にディケイドとフォーゼからベルトをもらつたんだ。」

輝「いろいろあるんだねえ。」

仁「ま、そういうわけだ。」

そのころ、どこかくらい道で。

ケータイを覗きながら悲しげに歩く男性がいた。

ケータイの画面にはこう書いてある。

鈴木つて「やせくな?

鈴木・ハマ

鈴木・ラビタン

まち鈴木氏ね

鈴木・がつぽれ大佐

マジアイツ学校くんなー空気が汚れる。

これを見ているのは、この画面に悪口を書かれている鈴木である。

鈴木「何で嫌われるんだろうな・・・。」

「そこのお前・・・。」

鈴木「何? 怪人?」

そこには、サソリを思わせる人形の怪人がいた。

「我は、スコーピオン・ゾディアーツ。この悪口を書いたやつが憎くないか・・・?」

鈴木「憎いよ・・・。」

スコーピオン「なら、このスイッチで無限の力を手にするか・・・?
復讐ができるぞ・・・。」

鈴木「欲しい・・・。そのスイッチ欲しい・・・。」

スコーピオン「これは無料でやる。だから、思う存分使え・・・。星に・・・願いを・・・。」

鈴木はボタンを押す。

すると、熊の姿をしたゾディアーツが現れた。

名を、ベア・ゾディアーツといふ。

スコーピオン「もつ・・・この世界に用はない・・・。」

スコーピオンは別の世界に消えていった。

鳴滝「まさか・・・ガンバラيدの世界といつのは偽りか・・・?
そういうえば、渡がガンバラيدの宇宙の中に世界があるとか言つて
いたな・・・まさかその説のほうが正しいのではないか・・。」

鳴滝は、未だにガンバラيدを探し続けている。
白いアストロスイッチカバンを持つて。

次の日。

生徒が校門から逃げ出す。

仁「なんだ?」

生徒「鈴木が・・・鈴木があああああ!」

輝「鈴木君つてまさか・・・!」

生徒「そうだよ!お前のクラスの鈴木だよ!」

仁「鈴木君・・・、あああの子か!つて、ゾディアーツかよ!大
熊座の!」

そして、ベアーは近くにいる生徒・・・つてあれ茜さんだよな!

ソラちゃん!

僕が助けるから!

だから見てて!

僕の、

「変身!」

クウガステイツ／呼応する魂

クウガ「はあ！とりやあ！」

僕はゾディアーツにパンチしていく。

しかし、ゾディアーツに軽々と投げられてしまう。

クウガ「負ける・・もんかあああああああ！」

俺たちは、ダスターをたちと戦っていた。

仁「せえい！はあ！せいやあああああ！」

宏「フツ！へつ！せい！」

次々とダスターを倒す。

しかし、ホントに戦闘員は弱いなあ。

クウガ「超変身！」

僕はドラゴンフォームに変身した。

そして、近くにあった木の棒をドラゴンロッドにして立ち向かった。

クウガ「はあ！せい！」

しかし、攻撃はゾディアーツには効かなかつた。

仁「変身！」

「ガンバラード ガ・ン・バ・ガンバ！」

ガンバラード「はああああああああ！」

俺はジャンプし、ゾディアーツにキックを決めようとするが、弾かれる。

ミオ「待たせたね！」

宏「ミオ！行くぜ！変身！」

宏はミオとともに仮面ライダー樹木に変身した。

樹木「さあ！行くぜ！」

「リーフブレード！」

俺はリーフブレードで攻撃する。
しかし、その攻撃も弾かれる。

ガンバラード「大丈夫か・・・？」

クウガ「そつちこそ。」

樹木「なんか手はないのか？」

ガンバラード「何があるはずだ！」

俺は、そう言ひう。

すると、クウガのベルトにあるアマダムが光り出す。

クウガ「なななな何が起こってるんだ？」

それに呼応するかのように、俺のベルトも樹木のベルトも光り出す。
そして、クウガのベルトから光球が現れ、俺のベルトから、真っ黒
なスイッチが現れ、樹木のベルトからゼンマイが現れる。
そして、それらが一つになり、一つのスイッチとなつた。
番号の書いてある部分に、クウガの紋章がついた。
ゼンマイを回してスイッチを起動するそつだ。

ガンバラード「さあ！行くぜ！」

「クウガ・オン」

そんな音声がなつた後、クウガの变身音声が鳴り響き、俺の体はマ
イティフォームのような装甲で覆われ、顔にはクウガの角がついた。

よお！「！これが、クウガマイティか！かつこいいな！」

この声は・・・シノビか？

そうだよ！これならお前も戦える！

分かつた！がんばってやるぜ！

突然、俺たちの体が黄金に輝いた。

クウガも、樹木も、俺も！

ガンバラード「行くぜ！」

俺は、ゾディアーツをアップ攻撃する。

そして、飛び上がったゾディアーツにクウガと樹木がダブルキックを放つ。

「クウガ・ゲキレツアタック」

そして、みんなに遅れて、俺はライダー・キックを決める。

ガンバラード「はああああああああああああああああああああああ！」

ゾディアーツの体は、大爆発を起こした。

そして、落下してきた鈴木をキャッチする。

ガンバラード「鈴木……？」

鈴木「。」

鈴木は気を失ったようだ。

クウガ「やつたね！」

樹木「やつたな！」

ガンバラード「ああ。」

その日の授業が終わると校門の前で世界の壁が現れた。
仁「輝、宏。俺はもう行くな。別の世界が待っている。」
輝「うん、分かった。行っておいで。」
宏「またどこかで会おうな。」
仁「じゃあな！」

俺は、別の世界へと消えていった。

しかし、戦いは終わったわけではなかった。

あのゾディアーツスイッチにはラストワンが残っていたのだ……。

SATAN OF WORLD／すれ違う戦士（前書き）

今回から、紅夜さんの作品「仮面ライダーサタン」、「俺の姉ち
んは・・・」と口アボします！
まず、今回は、「仮面ライダーサタン」から！

SATAN OF WORLD／すれ違う戦士

破壊された街。

死んでいる人々

一體なぜ「」のよ「」な「」ことが

真相はヤツらが知っている

元便」と「惡魔」九叶

ここは「デーモンリベリオン」の世界。その物語のパラレルである。

天使の中でも少し偉い「天使・ミカルゲリオ」は、街を部下達に破壊させていた。

みのようだ！」

? ? ? ? ? フジ

言方を繰り替わざ拂はる

ミカルゲリオはそのまま倒れる。

天使達は驚いて飛んできただよ、を見る

その戦士の名を「仮面ライダー ガンバライド」

俺は、部分に大砲のようなものを装備し、飛び上がる。そして、向かつてきた天使達をこつぱみじんに倒していく。

ミカルゲリオ「はあああああああ！」

ミカルゲリオも襲い掛かってくる。

「ブーメラン・オン」

俺は、×部分にスイッチを差込み、起動させる。足を横に振ると、ブーメランが発射された。そして、ミカルゲリオの体を裂き、瞬殺した。

ガンバラيد「貴様ら、この程度か・・・。」

そして、また別の場所。

春香「た・・・助けて・・・。」

春香という名の少女は恐るべき天使の前でおびえていた。

天使「死ねええええ！」

駿「待てよ。殺るなら俺を殺れ！」

天使「ならばそつちを・・・！」

駿「行くぜ！スカル！」

スカル「ああ！」

駿「変身！」

駿はベルトの力で仮面ライダー・サタンへと変身を遂げた。

サタンは背中の翼で天使に向かっていき、キック攻撃をする。

ガンバラード「はあ！」

「ガンバラード・ゲキレツアタック」

俺は遠くにいた敵に向かつてライダー・キックを放った。

その拍子に、黒い何かを見た。

二人のキックは天子を粉々に潰した。

ガンバラード「貴様、俺の敵か？」

サタン「お前が天使ならな。」

ガンバラード「俺は、天使の敵だ。」

サタン「なら仲間だ。協力しろ。」

天使は灰色の壁を出現させ、ライダーを一人出した。

一人はポセイドン、もう一人はオーガだ。

ガンバラード「じゃあ、ここいら倒そつじやん！」

サタン「ああ、やるか！」

俺たちは立ち向かっていく。

オーガ「お前ら・・・・潰す。」

ポセイドン「俺と、戦え！ただし、命乞いはするな。時間の無駄だ。」

「

俺はポセイドンと戦っている。

「クウガ・オン」

クウガステイツにチエンジし、ポセイドンの剣を奪う。
そして、力をこめてタイタンフォームになる。

ガンバラード「はあああああああ！せえい！」

「クウガ・ゲキレツアタック」

俺は、ポセイドンを必殺技で倒した。

サタン「はあ！」

オーガ「フッ！」

黒いライダーがぶつかり合つ。

サタン「！」

俺は、強くキック攻撃をした。

すると、オーガは大爆発を起こした。

ガンバラード「ここにはもう、用はないな。」

サタン「そうか、なら行けよ。別の場所の平和も守れよ。ここは俺
が、守るから。」

ガンバラード「なら、俺の姿がサマになつたらまた来てやる。」

サタン「待つてるぜ。」

俺は、別の世界に消えていった。

この世界で得たのは、拾った天使の羽。

無のエリア／途中経過

鳴滝「そこにいたのか・・・。」

仁「鳴滝さん・・・。」

鳴滝「どこにいたんだ・・・？」

仁「空我の世界と、サタンの世界。」

鳴滝「世界？？エリアではないのか？」

鳴滝は俺の話を聞いて驚く。

「こは、無のエリアである。
また飛ばされたようだ。」

鳴滝「そして、フォームを一つも手に入れたのか・・・。」

仁「うん。まあ一応。シノビとクウガ。」

鳴滝「そうか・・・。途中経過をありがとう。」

仁「それと、ゾーンメモリはなかつたな。」

鳴滝「なかつたのか・・・。ならWの世界に行くことにしてよつか。」

仁「ああ、そこならありそうだな。」

俺は、また別の世界に行つた。
そこには道の場所が広がつていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8544x/>

KAMEN RIDER GANBARIDE-CLIMAX HEROES-

2011年12月25日13時46分発行